

## 家族現象に潜む概念－現象への迫り方と研究デザイナー－

岐阜県立看護大学 泊 祐子

「家族」は、社会学（特に家族社会学）、心理学（特に家族心理学）、人類学、家政学、精神医学など様々な学問分野で扱われる学際的領域であり、近接領域の学問成果が借用されやすい。家族看護学は、その理論ベースに家族社会学理論をよく取り入れている。家族社会学は、家族にかかわる社会現象を対象に研究している（野々山：1999）。看護学では、現象が看護にかかわるものである場合に看護現象と呼び（野島：1992）、研究の焦点とする。家族看護学においては、看護学の範疇における家族にかかわる現象を研究対象とするとおいてみる。

ここで改めて家族の定義を見ると、森岡ら（1984）は、「夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要成員とし、成員相互の深い感情的包絡で結ばれた、第一次の福祉追求集団である」と定義している。家族の定義のしかたは、家族の形態、家族制度、家族構造、集団など、学問領域や理論・枠組みによって様々である。しかし、現代の家族の中にはその成員たちが憎しみあったり、お互いに回避し、「病理発生的な第一次集団」の場合もある。また、「家族は集団である」という定義ができないこともある。バージェス（1926）は、多数の国からの移民学生に講義し、学生たちの考える家族をレポートさせ、家族の共通項を見だし、家族を「相互作用しあう複数のパーソナリティの結合体」と定義した。学生たちの経験した主観をデータとしており、このような定義づけの仕方は、学ぶところが多い。この定義は、人が経験し認識した家族現象そのものであるといえる。

現象とは、「一般的にはわれわれに現れてくるものごと、感覚的な知覚に現れてくるものごと、われわれの主観的な観念の相関者としての現れを意味する（千田：1994）」。「すなわち、何かを知覚しているとき、その人の知覚のなかには多種多様なモノやコトが、何のまとまりもなく、雑多に入り込んでいるが、それらがその人の意識作用のなかで統一され、意味あるものに構成された世界が、その人の見ている現象である（野島：1999）。ヘーゲルのいう現象とは、直接に知覚されていない本質内容が具体的かたちをとって存在するようになったものである。現象の意味をつかみ、概念を抽出する。その作業を繰り返すことによって学問固有の学術用語が生成されその学問が発展する。現象に潜む意味を見るときは、何をどのように見ることなのか。

自然科学の研究方法は、客観的数値や法則を対象とした。しかし、社会・文化・人間という領域にまで自然科学の方法を全面的に適用することはできない。フッサールは、諸科学が「客観的」対象だと思い込んでいるものは、諸主観の

間でたまたま共通了解が成立したある関係性であり、「客観」があらかじめ存在するものではなく、相互主観的に構成されたものに過ぎない（竹田：1993）。

現象学的方法では、“現象”、すなわち「人間の意識に内在するもの」を分析して、今まで一般的にこうだと思われてきたものをかなぐり捨て（判断中止、エポケー）、純粹意識になり、その“現象”の真の意味を探求することである（本質直観）。常識や習慣から離れ、自分自身に立ち返るとき、そこに主体的全体験が現れ、そこから日常の経験、現象を見直せば（純粹意識から事物そのものを見る）、その本当の意味がわかるのである（那須・上子：1977）。見る者（看護者）が見ようと思うものを凝視すると、周辺にあるものはぼんやりと薄れ、見ようと思うものが浮かび上がってくる。見る位置を移動すると地と図が様々に変わる。見るものと見られるものの関係である。

看護学が対象とする家族を家族看護学の視点をもってどのように見ようとするのか。本シンポジウムでは、家族の経験している現象をどのように見るのか。

「家族」を構成する個人でみるのか、成員間関係で見るのか、集団としての家族みるのか。それはどのように見るのか。学会に参加の皆様と一緒に討論できればと思う。

## 文献

木田元(1999), 現象学事典, 千田義光 120-121, 弘文堂

木田元(1975), 現象学, 岩波新書.

竹田青嗣(1993), 初めての現象学, 海鳥社, 114-117.

竹田青嗣(1999), 現象学入門, 日本放送協会出版界.

須宗一・上子武次(1977), 家族病理の社会学, 弘文堂.

野々山久也・渡辺秀樹(1999), 家族社会学入門 家族研究の理論と技法, 文化書房博文社.

野島良子(1992), 看護学の根本問題, 日本看護科学会誌, 12(4): 1-8.

野島良子(1999), 看護学における学術用語の生成と諸問題, 看護研究, 32(5): 3-10.

比較家族史学会編(1995), 事典 家族, 130-135, 弘文堂.

森岡清美・望月崇(1984), 新しい家族社会学, 培風館.